

花神二斬殺
慶応長崎事件

司馬遼太郎

司馬遼太郎全集 第三十一卷

第三十一回配本

花神二 斬殺

慶応長崎事件他

定価 一八〇〇円

昭和四十九年三月三十日第一刷
昭和五十六年十二月一月第六刷

著者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(代表)〇三二六五一一二一

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

製函所 トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

化神二 斬殺
慶応長崎事件

馬遼太郎全集
31

司馬遼太郎全集第三十一卷

花神二

5

短編

壬生狂言の夜	149	喧嘩草雲	343
千葉周作	169	天明の絵師	363
英雄児	205	蘆雪を殺す	385
慶応長崎事件	231	倉敷の若旦那	403
五条陣屋	263	アームストロング砲	425
薩摩浄福寺党	281	美濃浪人	449
人斬り以蔵	297	小室某覚書	477
俠客万助珍談	329	斬殺	487
司馬遼太郎の世界	尾崎秀樹		527

装幀 三井永一
題字 中田 功
A D 粟屋 充

花
神
二

目次

京と江戸
彰義隊
江戸城
攻撃
蒼天

114 90 59 42 9

京と江戸

蔵六が京へのぼったのは、鳥羽伏見の戦いがおわって一月のちである。

「まだ寒いところで、有名な北野天神の梅もほころびてはおりません」

と、蔵六の門人の芸州(広島県)人船越衛は語っている。

「先生は、京を歩いてみます、とおっしゃって、北のはしから南郊の伏見までずっとお歩きになって、地形や人情をしらべておられるふうでした。伏見にゆかれて、旧幕府の奉行所をごらんになりました。なにぶん広闊たる構えでしきりに感心されている様子でした」

伏見奉行所に駐在していた長州兵の指揮官が、ここで大激戦があったと説明し、新選組の白兵突撃と会津兵の勇猛さを語り、このため官軍は一時は敗亡するかと覚悟したほどの苦戦であった、といった。が、蔵六は、

「アア、ソウデスカ」

と、ほとんど関心を示さない。この男は、すぎたいくさを回顧したがるような詩人的性格をもっておらず、それよ

りも官軍の兵營をどこにおくかということでも頭のなかがいっぱいだった。

「この伏見に置きましよう」

と、蔵六は現地できめた。

蔵六が京に入った二月七日より数日前、新政府(太政官)の制度がきまり、軍防事務局というものが設置された。征東のための国防省というべき存在であり、蔵六はその組織のなかで、

「判事加勢」

という辞令をもらった。判事には鳥丸光徳らの公卿や大名の名がならんでいるが、実際のしごとはこの「加勢」の蔵六がすることになっていた。

といって蔵六が重視されていたわけではない。

第一、蔵六どころではなかった。木戸(孝允・桂小五郎)らの方針で、

「長州はなるべく従に」

という姿勢が長州側にあった。薩摩藩の主導のおかげで長州がその窮境からすくわれ、一躍、時勢の主座にすわったのである。あくまでも薩摩を兄貴分としてたててゆこうという姿勢が長州側にあり、薩摩藩もそのつもりであった。薩摩人の気分というのは、兄貴分として立てられている以上は、どこまでも親切であった。

たとえばこの二月一日、関東親征の方策が起草されたが、その案は薩摩の大久保と西郷の手でたてられ、岩倉具視が

行政化した。

征東軍は親王をもつて総督とするが、事実上の総指揮官は西郷隆盛であり、別働隊である東山道コースの部隊指揮には土佐の板垣(当時態)退助があたることになった。

蔵六への声はかからない。

長州藩も、

「わが藩に村田なる者がおりますが」

と声を発することは遠慮をした。

要するに蔵六は、「軍防事務局判事加勢」として、事務官のしごとがあたえられたにすぎない。京都ではずっと東本願寺むかひの門徒宿を定宿とした。

「徳川慶喜を討つ」

という勅命が出たのは、蔵六が入京する数日前の二月三日であった。

その征東大総督として熾仁(たると)親王が命ぜられたのは同九日である。

が、軍隊はうごかない。

「うごこうにも、兵隊がおらぬ」

というのが実情であった。新政府の直屬軍というのはおらず、薩長の藩兵であり、他に土佐藩その他が加わったが、要するに各藩の藩兵だけが存在する。その軍費も、銃砲弾から行軍用のワラジにいたるまで各藩の費用でまかなわねばならず、その金がどの藩も乏しかった。

薩長はなんとか金はある。が、土佐藩ぐらいになると江戸まで出かけてゆく兵糧代もなく、これについて藩公の山内容堂が、

「こまつたことだが、金はなんとかあとで工面する。ともかく出発せよ」

といったほどであった。

結局、新政府はこの江戸征伐の軍費を京大坂の富商に出させることになるのだが、蔵六の入京当時、そういう経済問題が足カセになって、征東軍の腰は容易にあがらなかった。いずれにせよ、

「日本は一変し、京の天子が日本国皇帝になった」

ということを天下の民衆に対し、いそぎしらせねばならぬ。

が、それには天皇みずからが巡幸すればよい。江戸は徳川慶喜の勢力がそのままであるために危険であり、日本各地もまだ幕藩体制のままであるためにうかつには出てゆけない。その点、大坂は安全であった。

大坂は徳川家の直轄領(天領)であったが、鳥羽伏見での官軍勝利のあと、兵をこの地に入れ、京都とともに新政府最初の直屬地になった。

さらにいえば新政府は大坂の町人からばく大な金を借りあげたため、かれらに対し、

「新政府の威光」

というものをみせておかねばならない。このために大坂

行幸が決定をみた。蔵六が京に入ってほどもないころである。

が、これも経費不足のためすぐには実現せず、決定から実現まで一カ月かかった。

大坂行幸は、三月二十一日京都を出発、二十三日大坂着。その行幸は平安のむかし以来のもので、天皇は葱華輦そうかべんに乗り、地下官人が錦旗をささげ、山伏が道をきよめるためにホラ貝を吹き、百官が衣冠をただして前後にしたがうといったものだが、ただ護衛部隊だけは筒袖タンブクロといった一種の洋装であった。

その護衛部隊のお膳ぜんだてを蔵六がやった。

たとえば護衛部隊が天皇に礼をするとき、蔵六は西洋風に「捧銃ほうじゆう」をさせるつもりでいたところ、公卿たちが、

——立ったままで礼をしてはならぬ。

というので、結局、兵士たちは銃を地面に横たえ、ベタリと土下座して拝礼した。

「まるで降伏しているみたいだ」

と、蔵六は不愉快であった。しかし公卿たちのほうも立礼をさせたがる蔵六につよい警戒心をもった。

この時期、官軍の主力は東海道を東下して、江戸にせまっている。

京と江戸

一方、その別働軍である東山道部隊は、板垣退助にひきいられて甲府付近で小規模な戦闘をへたと、三月十三日、

武蔵府中から板橋あたりに充滿し、江戸攻撃の氣勢を示した。

主力軍は、西郷が大参謀になっている。十一日、その先鋒本営は池上に入った。

この間、西郷と幕府代表である勝安房守かつあんぼう（海舟）とのあいだに折衝があり、江戸が非戦のうちに開城さるべき方向にむかつてはなしがすすみつつあった。

このころ、江戸に回覧新聞が発行されている。ごく小部数で、体裁も半紙二つ折り版の冊子ながら、ニュースを盛りこんで読ませるといふ点では、その後の新聞の概念にまらずあてはまっている。

その三月二十一日付の記事に、

「さる十五日頃より、三街道の先鋒、追々江戸へ入込み、毎日市中を巡見す。然れども先々平穩にて、市中の者一同、少しく安堵す。何卒暴発の異変これなきように致したき事なり。此度かくの如く穩かなるは、日光宮様の御取扱、殊に勝安房守の尽力にて、参謀西郷某の周旋に依り、平和に成りたる由なり」

と、書かれている。

「参謀西郷某」

と、名前を略してあるのは、ひとつには西郷はまだ江戸人にとって知名でなかったからであろうし、ひとつは多少この薩摩人を軽侮してのことであろう。なぜなら同日付の別項の記事には「西郷吉之助」と姓名ともに書かれている

から、記者が名を知らなかつたわけではない。

記者は、幕臣である。

柳川春三という洋学者で、蔵六は江戸滞在当時、おなし蘭学者仲間としてつきあひがあつた。

春三は、この時代の洋学技術者として蔵六と似た経歴をもっている。

名古屋に生まれ、同藩の蘭学者にオランダ語をまなんで医者になった。その後、紀州藩がオランダ語の解説を必要としたのでまねかれて出仕し、ほどなく元治元年、幕府の洋学機関である開成所の教授になった。蔵六の経歴からいへばかれが幕府教授をやめて長州藩に転じたところから三、四年後に柳川が幕府教授になったことになる。

柳川春三は徳川家があぶなくなつたこの年の二月からこの「中外新聞」を出しはじめた。まず発行のための同人組織をつくつたが、同人は幕府の洋学者ばかりであつた。

柳川は編集長格だったが、元来手が器用だつたから自分で版下を書き、それをすぐ職人に彫らせるといふぐあいにして新聞をつくつた。発行は三、四日に一冊というぐあいだつたが、ときにはもつと間隔があいた。傾向はむろん幕臣だから佐幕的であつた。

「江戸は大変なさわがらしい」

と、それについてのさまざまなうわさが京に入ってくるが、混乱といへば新政府がおかれている京も同様であつた。

諸制度がととのわず、役所も公卿や諸藩差出しの役人たちがいわば梁山泊のように雑居して毎日なにをしようのかわからない。

蔵六は、東本願寺前の下宿から毎日御所にかよつてこの男だけはなにやら別で、大工が弁当をさげて毎日普請場に出かけてゆくように、いつも並な顔つきをしていた。

肥後熊本藩(細川家)の公子で、長岡護美というのちの子爵が蔵六の上司の席にいた。長岡護美は佐幕色の濃い細川家にあつては幕末のころからずつと倒幕主義でとおしてきた人物で、奇人で有名であり、その奇人ぶりをのちに明治帝から愛された人である。

「じつに風変わりなひとで、いろんな逸話が細川家につたわっています」

と、細川家の現当主の護貞氏がこの稿の筆者に語られたことがある。

「大村先生とはごく深い仲で」

と、長岡護美の遺談がある。深い仲というのは、長岡がこの京都太政官時代に蔵六の上司だつたという意味らしい。「大村先生とは毎日役所で一緒にあった。大坂の御親征(大坂行幸)のときも一緒だつた。もつとも大村先生は京都に用が多かつた。陸軍の軍制のことについてはどうしても何人より一番よく知っている。私も陪席してはいておどろくことが多かつた」

私が先生の宿へたずねてゆくと——と長岡護美はいう。

「すぐに戸棚とだなからシャンパンでも出して、今日は一杯あがらんか、というあんばいで、その様子はいかにも淡泊無我であった」

長岡護美は大藩の公子だから、蔵六がそんなぞんざいな言葉をつかたはずがないが、ともかくも役所の雑然としたふんいきのなかで、蔵六だけが別のふんいきをもっていた。志士あがりの政治家たちとはちがひ、蔵六は技術者だけに自分のやるべき仕事やその方向がはっきりしていたから、ちようど、図書館の司書がカードを整理するように着実なふんいきだったにちがひない。

このころ蔵六の下にいた三宮義胤さんのみやましたけという人物も、蔵六の様子について、

「なんでも七条通の本願寺の近所に先生は逗留とまりゆされていました」

と、語っている。

「あるとき先生の下宿にたずねてゆくと、先生は火鉢から火箸を抜かれました」

三宮義胤は、蔵六が奨励している筒袖にズボンという姿をきらい、和装でとびきり長い刀を畳の上に横たえていた。蔵六はその長刀を火箸でボンボンとたたき、

「どうもこういう長いものを差している人間には本当のことを語る気がしない」

といったから、三宮は「武士の魂をなんとされます」と腹をたてたが、蔵六はそっぽをむいていた。

とにかく、京は混沌こんとんとしている。

「薩摩が横暴すぎる」

という非難の聲が、はやくも新政府の公卿や諸藩の貢士きんし・徴士ちきうし（新政府役人）たちのあいだでごうごうとうずまいていた。

例の「小僧」と岩倉具視からいわれた西園寺公望さいおんじこうぼうが、山陰鎮撫に出発する前、

「北条が去って足利が出てきそうですね」

と、岩倉にいった。比喻ひやうを南北朝時代にとつて、建武けんぶの中興勢力が鎌倉の北条政権をたおしたかとおもうと、味方のなかからあたらしい反宮廷勢力として足利氏が頭をもた

げてきた、ということ、徳川氏と薩摩藩に比してそうだったのである。岩倉はこの才子をしかりつけ、

「子供にはわからぬ。その言葉を二度というな」

と、小声でささやいたという。たがいに公卿仲間だから共通の默契めいぎの上でこのささやきをかわしたのである。

ちなみに岩倉は公卿のなかで育てるべき人物はこの西園寺しかないとおもひ、政治の師匠格のような態度でこの青年に接していた。岩倉は蔵六に対しても、

——西園寺をよろしくたのむ。

と、何度もいっていた。蔵六も岩倉とよく似た見方をもっていたから西園寺を目にかけた。

「大村さんには可愛がられた」

と、西園寺は晩年に語っているから、蔵六はひょっとするとこの西園寺を薩長の上に立つ軍將に仕立てようとしたのかもしれない。

桂小五郎は、この時期、木戸準一郎という名前になっていた。かれは蔵六の階級よりはるかに上位で、新政府の最高官のひとつともいべき「顧問・参与」という職名をもっていた。

顧問・参与というのは、薩摩藩代表の小松帯刀と土佐藩代表の後藤象二郎、それに長州藩代表の木戸など数人だけであった。

木戸は、革命家としても政治家としても気むずかしすぎる男で、たえず例の鬱病がかれの風貌や言動に濃い隈をつくっており、この時期も、

「新政府の顧問を辞して国へもどりたい」

としきりにいうようになった。木戸にすれば桂小五郎のむかしから剣戟と戦乱と弾圧をくぐりぬけてきていわば大望がやっと成就した。新政府ができ、さらにはかれの半生にとって最大の目的ともいべき徳川氏を打倒するという事態になって、かれの鬱病が発したのである。

「顧問はまず、今日にても御免おおせつけられ候よう、かえすがえすも懇願」

と、この時期、三月二十八日付で同藩の広沢兵助(真臣)に手紙をかいている。

この時期、木戸は旧幕当時からゆきつけの円山の料亭

「今善」で蔵六をよび、右とよく似た内容のことを洩らし、「あとのことは先生に頼みます」

と、いった。蔵六は木戸の胸中を推しはかりかね、黙々と杯をかさねていたが、やがて、

「私にはよくわからない」

と、そっぽをむいた。蔵六には政治家の心境などは理解できないのである。

まったく蔵六には、木戸という人がわからない。

(木戸は猿まわしである。自分は猿である)

と、蔵六はかねて思っていた。むかし、江戸の小塚原で蔵六が女囚の屍体の解剖指導をしていたとき、たまたま長州の名士であったこの男がとおりかかり、その縁で幕府教授をやめ、故郷の藩である長州につかえた。以後、藩における蔵六の運命をひとつひとつ作って行ったのはこの木戸であり、いま新政府樹立とともに京に出てきたのも、木戸のさしがねである。

その木戸が、新政府を去るという。

(自分より歳下だが、よほど気むずかしくできている)

と、蔵六はほとほと考えあぐねた。

(薩人の専断に腹を立てているらしい)

ということはあきらかなのだが、とはいえず、木戸ののど奥から出てくるその肉声は、それとはまるで逆なのである。

「薩人の横暴」

と、この時期いわれた薩人とは、当然ながらその代表である西郷と大久保に對することばであつた。

ついでながら、樹立早々のこの新政府というのは、薩長政權ではなく、かきあつめられるだけのあらゆる藩が参加している。その理由を露骨にいえば、徳川氏をたおすために猫の手でも借りたいところから出ていた。しかしながら、その主導勢力は薩長である。

というより、薩摩藩であつた。さらにしぼつていえば、西郷と大久保であるといつていい。

「いま薩摩藩に對する非難が、ごうごうとおこつている。新政府に参加した諸藩の士で、薩摩藩の専横を非難せぬ者はない」

たとえば西郷が、江戸を平和裡にひらいてしまつたといふことも、事の善悪はともかく、そのあまりにもあざやかな専決行動が、新政府のひとびとの感情を害したというむきがある。が、木戸は具体的にはいわない。

「これはわが長州の恥である」
 というのである。

つまり、幕末多難のとき、いまは亡き土州人坂本竜馬が仲介して薩長連合ができあがり、そのとき両藩ともどもに苦難を切りぬけようと誓ひあつた。そのときの長州代表が木戸であり、木戸はつねに薩長連合の精神を説いてきた。であるのにいま世間の非難の火の粉を浴びているのは薩摩藩だけであり、長州藩はひとりいい子になつてゐる。

「これは恥だ」

と木戸はいうのだが、かれの言葉は顔面どおりにはうけとれない。つまり薩摩藩のみが出しゃばつて、長州藩は従の従になつており、極端にいえばなにもしておらず、また何かする場合も西郷や大久保の盛名に押されて千両役者の役割を与えられていない、という状態を指すらしい。が、木戸は同藩の者に對してさえ、この不満をはつきりとは言わない。

——徳川慶喜を殺すか、生かすか。

というのが、維新といふこの大革命の一頂点を示すものであろう。

が、いったい誰が殺すと言ひ、たれが生かすといったかは、政治の紛糾期だけによくわからない。

薩長両閥にわけていえば、
 「長州人は慶喜を殺したがっている」

と、薩摩人は信じていた。その一般的な理由はたれもが推察できた。長州藩は累年幕府にいじめられ、無数の犠牲者を出してきた。その憎悪は深刻なものがあつて、憎悪の對象を一人にしぼるとすれば、徳川慶喜しかない。

げんに、政治的に責任のない処士(浪士)たちは、
 「首魁の首を刎ねずんば、天下一新の実があがらない」

と、さかんに横議していた。旧幕以来、浪士の保護者は長州藩であり、自然、それが長州の主張のようになつてら